

昭和四十年代初め 筑後川田園物語

由比和子

菜の花畑

小学校の敷地内に、雨の日は運動場、高い天井から窓端の暗幕を引けば映画館に早変わり、また浪曲師や大衆演芸が来れば町の娯楽施設にもなる立派な講堂があった。

そして、そこでは稚拙極まりないものであったが、秘密裏に性教育が行われた。

「女子だけ講堂に集まるように」

教師の指示は男女一緒にの教室ではされず、女子から女子へとひそやかな口伝でつたわり、そして今、その広い講堂に、男子の目を避けるためか窓端から離れた真ん中あたりに、六年生の女子全員が移動黒板を前に体操座りして静かに話を待っている。

かつ子は、この一連の秘密めいた流れに胸をときめかせていた。女子には男子の知らない世界がある。男子の知ってはならない体の秘密がある。

二回目のこの日、話の内容は前回とあまり変わらなかつた。黒板には養護の先生が書いた、やじろべえを連想させる簡単な絵があるのみ。先生が棒でやじろべえの先を指しながら話し始める。

「ここに卵があつてね、卵が赤ちゃんにならなかつたら、もう栄養はいらないから血が流れます。このことを月経といいます」

棒の先はやじろべえの中央まで動き、血が流れることを示すが、どこからどう血が出るのか一向にわからない。ただ卵のありかはわかつている。手の平の根元を親指で強く押せば、その下の手首のところに、小さな丸いものがぶ



つくりと浮かび上がる。きつとそれが卵だ。皆でその数を、うちは一つだの、二つだのと、最近競い合っている。

「先生、卵は私も友達も両方合わせて二つしかなかけど、それでよかとですか」

ある子が、とうとう不安になって手首の内側を示して訊いた。

「手首？ ああ、ごめんなさい」と、先生は慌ててやじるべえを、人体を表す線で囲った。初めてやじるべえは腹部にあることがわかった。

「このことは、あなたたちのおへそあたりのお話ですよ。そこに赤ちゃんを産むための子宮や卵巣があるのですよ」

ゲッケイ、シキユウ、ランソウと初めて聞く名称ばかり頭に残り、結局よくわからないまま終わった。

講堂での話がすんで、かつ子は下校している。静かな中に砂利を踏む音だけが響く。前を同じクラスの夕子が歩いている。夕子は五年生の時から胸はふくらみ、頬はにきびの赤いできものにおおわれている。皆と話さず、昼休みも教室でじっと座っていることが多い。

そういえば、夕子のスカートが赤黒く汚れていることがあった。一部の男子がそれを不思議がり、そしてからかった。当然男子は禁忌に触れたかどで職員室に呼ばれ、担任

から一方的にびんたされた。

夕子に関わった男子がこっぴどく叱られたことで、皆も夕子に距離をおくようになった。夕子の方も体育の時間に腹痛とかで休むし、プールも見学が多いので、ますます孤立していった。

だがこの頃、かつ子は自分も胸がふくらみ始めていて、手で押すと中のしこりが痛い。急に親しみを覚えて、夕子の横に並んで話しかけた。

「夕子ちゃん、今日の女子だけの話、わかった？」

思いがけないかつ子の問いに、夕子は一瞬驚いて顔を上げたが、すぐにうつむいて、呟くように言った。

「お母さんがね、『お母さんになるための準備』と話したことと同じ気がする」

「ふーん、うちたち卵持つてるけんね」

本当に全く知らなかった世界の始まりだ。何だかともわくわくした。

通学路は川に沿った長い往還を過ぎて、土手の上まで来ていた。ふっと頬をかすめた温かい風に導かれるように、かつ子は眼下に広がる菜の花畑に目を移した。

見事な黄色の海。突き抜けるような青い空から降り注ぐ陽光の雨を浴びて、菜の花畑は一面鮮やかな黄色に輝いている。菜の花畑は点在する集落を包み込みながら、脊振

山の麓まで続いている。

かつ子は大きく息を吸い込んだ。もわもわとした空気が肺腑にしみわたる。耳をすますと、菜の花に群がる蜜蜂のうなり声が微かに聞こえてくる。田圃の中にどれだけの蜜蜂がいるのだろうか。何百万、何億匹……、いや数えきれないほどだ。

そんなことをぼんやり考えていると、夕子が何かを見つけて、その方へ走っていった。土手の少し下がった所に、イーゼルを立ててカンバスに向かつて絵を描いている男性がいる。かつ子も誘われるように夕子についていく。

「信次おじちゃん、今日は何描いてるの？」

「うん、菜の花畑だよ。花の色がむつかしくてね。よく見ると、さまざまな色をしているけんね」

夕子はこの絵描きのおじちゃんとは同じ集落ということもあって親しいようだ。おじちゃんといっても三十代後半だが、父さんよりずっと若く見えた。

「信次おじちゃん、今度私の絵を描いて……」

夕子はちょっと媚びるように、体を少しくねらせて言った。

「モデルになってくれるのかい？」

おじちゃんが面白がっている。

「うん……」

傾き方も上目遣いで、自分にはまねのできない仕草……。

かつ子は、夕子の体の変化のせいだと感じた。目立つ胸のふくらみや、腰のくびれがそうさせている。まるで別人だ。「もう帰れ。親が心配するぞ」

おじちゃんは、これ以上じやまをされては困るというふうに、二人を帰路に促す。

「うん、帰るよ。しっかり描いてね」と、夕子は笑みを送って弾むように農道の中に入っていく。かつ子も遠回りになるけど、つい夕子についていった。

道はリヤカーや馬車の轆わだちを残してクローバーにおおわれている。両側はかつ子たちと同じ背丈まで伸びた菜の花畑。菜の花の重たい匂いが鼻につく。しばらく二人は黙って歩いた。

「夕子ちゃん、あのおじちゃん好いとると？」

かつ子は気になっていることを訊いた。

「うん、好いとるとよ」

「どうして？」

どう見ても年が違いすぎるし、おじちゃんの方は夕子に単に子どもとしてしか見ていない。

「どうしてか、わからん。ただね、信次おじちゃんは五、六年、東京で絵の勉強してきているとよ。素封家の親戚から費用を借りてからししかけど。お母さんが『垢抜けして

戻ってきてある』とか言ってたからかもしれないね。でもね、あのおじちゃんが好いとる人は玉代おばちゃんよ」

「玉代おばちゃん？」

「えーとね、信次おじちゃんの兄さんだった人のお嫁さんよ。もうすぐ、そのお婆ちゃんがいるよ。畑でいつも働いているけん」

夕子がそう話してまもなく野菜畑が開けて、一人の農婦の姿が目に入った。農婦は春野菜に施肥をしている。

「玉代お婆ちゃん」と、夕子が声をかけると、玉代は腰を伸ばして二人の方を向いた。

「今帰つてるとね」

玉代は笑顔を作つて応えると、再び俯いて鍬を動かさそうとした。

そこへ信次おじちゃんが自転車で作つてきた。今日の絵描きは終わつたのだろう。荷台にはイーゼルやカンバスなどがぐくりつけてある。自転車を止めて畦に立つと、玉代お婆ちゃんに向かつて言った。

「義姉さん、もうはつきりお返事を聞かせてください」

信次おじちゃんの声が震えている。表情もさつきカンバスに向かつていた時とは違つて、切羽詰まった形相を帯びている。

「いめんささ。どうしてもふんざりがつかなくて……」

農作業の帰りに、土手の上から遠く汽車が煙を吐いて通り過ぎていくのを見ると、あの人が帰つてきそうな気がして仕方なかとよ」

玉代はうつむいたままだ。

「兄は戦地に赴く時、あとはよろしくと僕に頼みました。その兄が戦死してから、もう十年以上がたちました。兄はどんな思いで死んでいったか。義姉さんのことが一番気掛かりだったと思います。父母も僕とあなたが一緒にいることを望んでいるし、安心します」

「便宜上ですか？」

「いいえ、東京で絵の勉強に行かせてもらっている間、ずっとあなたのことを考えていた。幸せにしてあげたい。好きなのです」

「東京で絵を学んだ将来の画家の妻が、私でよかわげがありません」

「僕も学徒出陣で死を覚悟した身。国のために死ぬことが生きる道だった。それが戦争が終わり、目的を失い、どう生きてよいのかわからなくなった。それが、やっと美しいものを美しいと感じる心を取り戻し、絵を描いていこうと決心した。そして、あなたがいた。農作業から体を起こし、夕焼けを見つめるあなたの横顔がとても美しかった。守つてあげたいと思つた」

「やめてください」

玉代おぼちゃんは施肥をやめ、両手で耳を塞いだ。

「汽車に乗って、どこか知らない土地へ行行って自分を見つめ直したい」

折しも、耳納山の麓を走る久大線の汽車の音がボーッと聞こえる。

「……そうですか。それでも僕は待ちます」

信次おじちゃんはきつぱりと言って、自転車をこぎ帰っていった。背中が淋しさに震えていた。

二人のやりとりを引き込まれていたかつ子と夕子は、玉代おぼちゃんの頬を伝う涙に、そして信次おじちゃんの苦しい思いを目の当たりにして、しばし茫然としていた。

かつ子は一人で下校している。今日はひとときわ砂利の凹凸がうすい靴底に伝わってくる。どつくん……。今、血が出ている。体内から溢れ出る生温かい血を、綿が吸ってくれる。下校前に綿を替えたから、漏れ出る心配はないが、生理バンドのゴム取り付けボタンが、歩くたびに皮膚の柔らかいところに当たって、ちくちくと痛い。今日一日、体もだるかった。

心躍らせた女子だけの体の秘密が、こんなにも苦痛を伴うとは……。しかも、これがこの先三十年以上も続くとい

うではないか。かつ子は暗い気持ちになった。

「かつ子ちゃん、元気なかね」

不意に背後から声を掛けられた。振り向くと夕子だ。夕子が横に並んでかつ子の顔を見上げる。

「うん、うちも先月から月経が始まったとよ。お母さんが赤飯炊いてお祝いしてくれた。今月ふつ日目で今日は特に多かとよ。はよ帰って綿を替えんと思ってる」

「この頃、よかとが出ているよ。親類の従姉が教えてくれた。それは丈夫で、すぐはめられる。いちいち綿にちり紙敷いたの用意せんでよかとよ」

「ほんと!? お母さんに話してみる」

二人は土手の上まで来ている。風雨も日照りも何のさえない物のない一・五キロの長い往還を歩いた先のこの土手の上は、ちよつとひと休みといった風情があった。

眼下を見渡す。抑草作用のある菜の花々は既に土中に鋤き込まれ、処々枯れ果てた残骸を覗かせている。

「おや、信次さんと玉代さんが一緒にいるよ」

かつ子は、青々とした甘藍畑かんらんの中の二人に瞠目して言った。二人は仲睦まじく収穫に励んでいる。

「そうそう、二人は結婚したとよ」

夕子がこともなげに言う。

「あげん言い合ってたとに？」

「それがね、お母さんと近所の人が話しているとちらつと聞いたけど、信次おじちゃんが納屋で玉代おばちゃんを抱きすくめてから、おばちゃん、ころつと変わったらしかよ」

「あげん、遠くへ行つて自分を見つめ直したいとか言つとつたに？」

かつ子は納得いかなかった。

「うちにもわからん。あ、ごめん。急に便所に行きたくなつた。急いで帰るね」

通学路に公衆トイレはない。我慢できない時は田圃の中に入つて用を足させてもらうしかない。

「あとで宿題、一緒にしようね」と言い放ち、夕子は走つて帰つていった。

かつ子は畑の中の二人を見つめる。信次さんが絵を捨てたわけではないだろう。今日は絵筆の代わりに鎌を持ち、手伝っているのに違いない。当然、夫婦としてありうべき姿で、自分の父母もいつも一緒に田圃で働いている。ほほえましい姿ではあるが、玉代さんには一歩外へ踏み出してほしかった。

どつくん。また血が溢れ出ている。鈍い腹部の痛みも収まらない。こんな大きな体の負担を背負っているならば、もしかしたら女は思うように生きてはいけないのか

もしれない。

かつ子は茫漠とした不安を抱えて土手を下りていく。二人の笑い声が聞こえる。かつ子は二人のいる畑へ近づいていった。

かつ子は畦に立って玉代を見ている。人はそんなに安易に自分を曲げていけるものだろうか。

玉代が不審に思つて振り向いたのをきっかけに、かつ子は声を発した。

「前にここで、汽車に乗つて遠くへ行き自分を見つめ直したいと言つてあつたのは、どうなつたのですか」

玉代は突然のかつ子の怒つたような口調に驚いて、しばらくかつ子を見ていたが、ふつと思ひ出し笑いをして応じた。

「行つたよ。汽車に乗つて大阪まで行つたよ。二十日ぐらいいいたかな。とにかく人が多くて、とても自分は住めな一と思つた。そのうち土が恋しくなつてね、早々に戻つてきたとよ。

毎日汽車ののんびりした音を聞いていると、乗つていった先に何かよかことが待っているような気がするね。でも実際は何もない。自分の中にしか幸せはないとね。そんなこともあつて踏ん切りがついたとよね」

玉代は、思いがけず小学生に自分の事情を話したことで、

すつきりとした表情になった。

「で、信次さんの方はどうですか」

「僕も田舎が合ってるよ。マイペースで描いていくよ。

この雄大な筑紫平野、そしてそれを囲むように延びている脊振山。夕焼け空は最高だ。ここに勝るところはない」

信次は両手を広げて話し終えると、にっこりと笑った。

あとはかつ子には目もくれず、二人は日が暮れるまでには終わらせたいと、鎌を動かし始めた。かつ子は大人の事情に口を挟んだ自分の愚かさを恥じるように立ち尽くした。

そこへ、夕子が「宿題やろうよ」とやってきた。そうだった。今日の宿題は夕日の入りを画用紙に描くのだった。

「うち、家に一度帰って綿を替えてくるから、西側の竹林の前で待っててね」

「そう、大変ね。じゃ、うち、そこで待つとく」

夕子が戻っていく後ろ姿を見ながら、かつ子は今日の理科の授業を思い出していた。先生が、右手に抱えたドッチボールのボールを太陽に見立て、左手に持った小さなボールを地球に見立て、動かしながら地球が太陽の周りを回っていることを懸命に教えていたが、よくわからなかった。現実の生活とあまりにも大きくかけ離れていて、実感がないのだ。

夕日に染まり、竹林の前にぼつんと立つ夕子は絵になりそうだと、信次さんに教えたいと思いつきながら、かつ子は一杯急ぎ足で家へ向かったのだった。

もみじ

小学校では月一回の割で講堂での映画鑑賞があった。

今日はその日で、作画映画の『安寿と厨子王』があった。

下校時、かつ子は映画の余韻に浸りつつ、土間で靴を履いた。

厨子王を逃がした後、安寿は池に身を投げる。その場面、池の中に吸い込まれるように沈んでいく安寿の姿が目には焼き付いている。周到な準備をして死を覚悟し、弟を守る姉の潔さに、かつ子は心を揺さぶられた。逃げ切った厨子王は、時を経て、ぼろをまとった盲目の母親との再会を果たす。かつ子は母子の抱き合う場面を思い出して目が潤んだ。

厨子王は持っていた守本尊まもりほんぞんを母親の目に当てる。すると目が開き、お互いを確かめ合って再び抱き合う。

目が開かなかつたらどうなのだろう。そんなことを真

剣に考えながら校門を出ようとした時、「かつ子ちゃん」と呼び止められた。

給食室の前に、白い服と白いビニールのエプロンを付け、白の長靴を履いた給食のおばさんが立っている。顔をよく見ると、以前家の隣に住んでいたスミ子おばさんだ。

「おばちゃん、どうしてここに？」

なつかしかった。

「ふた月前から、ここで働いとるとよ。こうして今頃、かつ子ちゃんに会おうと待ってとったばってん、なかなか会えんでね。今日やっと会えた。みんな元気にしてあるね？」

「はい、元気です」

「そやけど大きゅうなったね。うちが引つ越した時はまだ保育園やったもんね。そばってん、すぐわかったよ」

「うちもすぐわかりました」

本当にそうだった。にこにこ顔は健在だ。引つ越していつてからも、父さんがスミ子さんはどんなことがあっても笑顔の絶えん人だったとほめていた。

「話は尽きんばってん、あと洗い物が残ってるけん、仕事の戻るね。あ、そうそう、今日晁あきがそっちにお邪魔すると言ったもんね」

「晁ちゃんか？」

「そう、今浪人中でね」

「ろうにんち、何？」

「今年大学に落ちてね、また受けるために勉強しとるとよ」

小学生の時の晁しか知らないので、全く見当がつかなくなつた。

「急に子どもの時住んでたところに行きたかと言い出してね。気晴らしとは思うけど、来た時にはよろしくね。ご迷惑かけるけど、キヌさんによろしく言つていてね」

キヌとは、かつ子の祖母だ。

「はい……」

「これ、給食の残りのパンばってん、よかつたら食べてね」と、おばさんはざら紙に包んだものを差し出した。

かつ子は礼を言つてパンを受け取ると、足早に歩き出した。帰つたら糶もち千しのむしろの片付けの手伝いがあった。

晁が来る前にすませておきたいと思つた。

かつ子は貰つた包みを大切に両手で持つて、最近車の通行が目立つようになった往還を歩く。柔らかいパンの感触がざら紙を通して手に伝わってくる。上には銀紙にくるまれたバターがのせてあるようだ。夏ならば、ちよつと指に力が入れば銀紙からバターがとろけ出るところだが、もう風が冷たい季節、バターは硬いままだ。

往還の両側は水田で、収穫が終わった田圃のそれぞれに細長い家状に組まれた干しわらがあり、それはあたかも妖精たちがわらの家から家へと遊び回っているような風情があった。

十一月半ばの風は冷たい。土手の上まで来た時、田圃から吹き上げてくる風に首を縮め、スカートから出た脚は水を浴びたように寒かった。

だが、今かつ子はそういう寒さが気にならないほど心がいっぱいで、道端の枯れ草も生き生きと見えた。思いがけなく優しくかったスミ子さんに会ったことがうれしく、何よりも晃ちゃんが来ることで胸がどきどきした。

集落の端の畑に野菜の植え付けをする父母の姿が見える。今日スミ子さんからパンを貰ったよ、晃ちゃんが来るよ、と大声で知らせたい気持ちを抑えて、かつ子は帰路を急いだ。

家に着き、おずおずと中に入ると、まだ晃は来ていなかった。ばあちゃんに今日の出来事を手短かに話す。

「晃が来るとな。何年ぶりに会うかの」

キヌが指折り数えている。

「うちが五歳の時に引越していったから六年ぶりよ」

「そやけど、スミ子さんが給食室で働いとるなら、かつ

子はちよくちよく会えるたいね」

「うん、また残りのパンが貰えるやろね」

「またそげなこつば。そばってん、隣のこつば、うちはよう世話しとるよ。筑後川が氾濫して大洪水になった時はうちに避難してきたし、米や砂糖、しょう油は、よう貸しよったよ」

「そうやったん。あ、うち、お客が来る前に粃片付けてくるよ」

かつ子はランドセルを下ろして外に出た。普段はキヌと二人で粃を包み込み、たんだむしろの両側を持ってやるが、今日は一人で小屋の中まで引きずっていく。むしろは数個ある。けっこうな重労働だ。

晃からは幼児期、よく可愛がってもらっていた。二人並んで写っている写真もある。どんな若者になっているだろう。馬に蹴られた頬の傷は今もあるだろうか。馬の尻を棒でつついて、いきなり後ろ足で顔を蹴られたのだ。そんなことを考えていると、むしろの重さもあまり感じなかった。

「ああ、一人で大変だ」

近づいてきてむしろの端を持ってくれたのは、まぎれもなく晃だ。

「いつも一人で？」

「いや、今日だけ」

ぶつきら棒になっているのが自分でもわかる。何故なのか。恥ずかしいから？

むしろの片付けを終えて、しばらく二人向き合う。晁の目が泳いでいる。

「かつ子ちゃん？ 大きくなったなあ。六年生だろ？」
ちゃんと覚えてくれていた。かつ子はうれしくなった。

「今日ね、学校でおぼちゃんと会って、晁ちゃんが来る
と知って待ってたよ」

だんだん気持ち弾んでくる。

「ぼあちゃんがいるよ」と、かつ子は晁を家の中に促す。

「こんにちは。突然来てすみません」

晁の声に奥からキヌが出てきた。

「晁ちゃん。さ、上がらんの。よか男になって……」

富三さんに似てこらっしやったな」

晁はキヌが出したお茶をすすって苦笑いした。富三と

は晁の父親だ。

「今日たまたま作ったソーダ饅頭、食べんね」

キヌは表面に数本のひび割れの入った黄色がかったソーダ饅頭を盛ったしよけを、晁の前に置いた。

「わあ、なつかしか。キヌさんのソーダ饅頭は絶品でした。いつも分けてもらって楽しみでした」

晁は早速、ソーダ饅頭を手にとって食べる。

「それで、みんな元氣してあるね？」

「父は三年前に大腸ガンで逝って、祖母は半年前に亡くなりました。最後は寝たきりで、母と僕とで看ました。上の兄二人は外で働いています」

「そうだったとね。スミ子さんも苦勞の多かね。かつ子
の話じゃ、小学校の給食室で働きござるしね。それで、晁
おまえはどうしとるとね」

かつ子が浪人だと伝えていたが、キヌはあまり理解して
いないようだ。

「大学受験のため、家で一人で勉強しています」

「そげな大事なこと。お母さんをはよ楽にさせないかん
よ」

「はい、ときどき土木のアルバイトをしています」

どうりで日焼けして、着ているものも上着は白っぽいが
ズボンは作業着に近かった。

晁は話題を変えようと、お茶を飲み干し話し始める。

「ここにおじやまする前に、小学校の時の同級生の家を
回ったけど、雄一君は中学卒業して集団就職で東京に行っ
とった。茂君は農業高校出て農業を継いどった。家で泥
のついた人參を洗いよった。生で食べてみると勧められ
たのでかじったら、すぐく甘かった。みんながんばるとる。
なつかしかった」